

平成26年度 栄東中学校入学試験問題

東大クラス選抜Ⅰ

〔国 語〕

|          |  |
|----------|--|
| 受験<br>番号 |  |
| 整理<br>番号 |  |
| 氏 名      |  |

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 試験開始の合図があったら、**問題用紙**と**解答用紙**のどちらにも**受験番号**と**整理番号**と**氏名**を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で21 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問事項があったら、だまって手をあげて  
監督かんとくの先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、**問題用紙**と**解答用紙**は別々にして、**整理番号順**に監督の先生  
の指示にしたがって提出してください。

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の(①)～(⑩)に入る言葉として最も適切なものをあとの【語群】から選び、漢字に直して答えなさい。

- 1. 「家族が無病(①)であることが一番だ」と父は言った。
- 2. 運動会のために準備してきたが、悪天候のため、その努力は(②)に終わった。
- 3. 電話もメールもない時代、相手に用件を伝えるためには(③)をしたためるしかなかった。
- 4. 祖母はおだやかな生活を願っていたが、予期しない出来事の連続で、(④)に満ちた人生を送った。
- 5. 世界経済の今後を話し合うために、首脳(⑤)が行われた。
- 6. 彼は、大会委員長としての(⑥)を見事に果たした。
- 7. 母へのプレゼント代は、姉と(⑦)することになった。
- 8. アジア大陸では、大小さまざまな国の(⑧)の歴史を見ることが出来る。
- 9. 通行許可証がなかなか(⑨)されずに困った。
- 10. (⑩)の勢いで勝ち進んだ。

| 【語群】 |       |      |      |
|------|-------|------|------|
| コウフ  | カイダン  | コウボウ | ハチク  |
| セツパン | ジュウセキ | ソクサイ | シヨカン |
|      |       |      | ハラン  |

問二 次の文の――線部の言葉はア～オの、どの言葉にかかっていますか。それぞれ記号で答えなさい。

- 1. 彼は見事に 多くの 声援<sup>ア</sup>を 受けながら 目標<sup>ウ</sup>に 達<sup>エ</sup>して うれしそ<sup>オ</sup>うだった。
- 2. やることが多すぎて、うっかり 母<sup>ア</sup>との 約束<sup>イ</sup>を 忘<sup>ウ</sup>れて 出<sup>エ</sup>かけてしまい、怒<sup>オ</sup>られた。
- 3. 山の向こうから黒雲<sup>ア</sup>が ものすごい 勢<sup>イ</sup>いで せま<sup>ウ</sup>ってきたかと思<sup>エ</sup>うと、突然 激<sup>エ</sup>しい 雨<sup>オ</sup>が 降<sup>オ</sup>り出した。

問三 次の――線部と同じ種類の語を選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 1. 日が暮れて、空の色は次第に暗<sup>ウ</sup>く、あたりも静かになっ<sup>エ</sup>ていった。  
ア 多さ      イ 溶く      ウ 痛い      エ ある      オ 立派
- 2. 雨が降りそうなので、急いで家に帰<sup>エ</sup>る。  
ア 高い      イ 大きさ      ウ 勢い      エ 流れ      オ 効く

〔二〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

私が今コインを投げようとする。そのとき裏がでるか表がでるかは半々だ（1/2の確率だ）、ということは何を意味しているのだろうか。ここで大切なのは、今問題にしているのはこれから投げるというただ一回きりの事件についてである、ということである。これから何十回も投げてそのうち表と裏が大体半々にでる、というのではないのである。次のただ一回きりの投げが問題なのだ。そこで投げてみる。表がでた。そのことで裏表のチャンスは半々だと言ったことが当たったことになるだろうか。もちろんなまい。このとき、裏のでるチャンスは9/10だと言ったとして同様である。それはなお表がでる可能性もある、と言っているのだから。

A、裏と表がでる可能性が共にあることを言う確率的予言では、表がでれば裏のでる可能性を示す機会は失われ、裏がでれば表の可能性は永久に失われる。B、それを受けるも拒むも私の自由だと言っても、その一方をすれば他方をする自由を示す道

が論理的に失われるのと同様である。しかも確率的予言はその両立不可能な二つの可能性を云々するのである。

要するに、一回きりの事件では、前もってその確率を云々しても、その予言の当たり外れを言うことは意味をなさないのである。

確率いくらというところが正しかったか誤っていたかを定める方法がないからである。だがわれわれの日常生活で確率を問題にしたのは大抵は一回きりの事件の確率なのである。

緊急事なのである。ところがこのような一回きりの事件の確率が当たった外れたということが意味をなさないようなものならば、一体われわれは何をしているのだろうか。

数学者はこう言うかもしれない。明日晴れる確率が8/10だ、というのは実は、現在の気象状況に似たケースではこれまでその8/10が晴れであったということなのだ、と。なるほど気象庁の予報官はその意味で天気予報をしているのだろう。C、われわれ

の方で今日問題にしているのは明日の天気であって過去の気象ではないのである。明日の天気が晴れる確率が8/10だといっているのである。過去の気象統計はその参考でしかないのである。自分が後何年くらい生きられるだろうというとき、過去の日本人の（自分の年齢層の）余命が平均何年だと聞かされてもそれはあくまで参考でしかないのと同じである。物理学者にとっても、ある放射性元素の半減期を知るのは個々の原子の放射性崩壊については単なる参考にしかならない。

では一回きりの個別的事件の確率を云々することは何を意味しているのだろうか。それは無意味であるはずはない。とにかくわれわれは「明日は多分雨だろう」ということに十分な意味を感じているのだから。私はそれは単なる予測の命題ではなく、自分が生きる上での心構えの表現であると思う。雨かもしれない、という覚悟をしながら晴れだとして生きることには賭ける、という心構えの表現だ。だから、「明日は八分通り雨だろう」と言うことに真偽を云々すべきでもなく、あれかこれかと言う場合のように当たり外れを云々すべきでもない。云々しようにもできないのである。繰り返すことになるが、雨になった場合に、「明日は八分通り雨だ」ということと「明日は七分通り雨だ」ということのどちらが偽であるとか外れたかということとはできないからである。とにかくその二通りの言い方のどちらもが雨になることはあるだろうと言っているのだから。われわれに伝えるのは、その心構えで明日を迎える場合の生き方のよしあしなのである。八分通りと七分通りの間になんらかの違いを含ませて言っている人には、翌日雨が降った場合「八分通り」の心構えの方がよりうまく生きられるのである。お天気の場合はその差は普通大きくはあまい。しかし、賭博師や株屋、将軍や病人の明日の状態にとってはその差は大枚の金や命であがなうことになる差なのである。

最近亡くなったオックスフォードの哲学者オースティンは、ものの言い方の中に真偽を云々できない種類のものが数多くあることを明瞭に指摘した人である。D、約束や誓いの言葉である。「明日必ず参ります」という約束、「神かけて嘘は申しません」とい

う誓い、これらに真偽をいうことは場違いである。それらは真でもなければ偽でもない。約束や誓いはただ守られるか破られるかなのである。私は、一回きりの事件についての確率を言う言葉もまたそれに類するものだと言いたいのである。それらは約束や誓いと

同様に、真だとか偽だとか言えない。E、あれかこれかといった確率抜ききつぱりした予言のようには当たったとか外れたとも言えない。一回きりの事件についての確率的予言は未来に対する心構えの表現なのであり、それについては程度を含んだ成功失敗を言うことだけができるものである。簡単にいってしまえば、それらは来るべき人生への賭けの表現なのである。

人生に賭ける、ということは単に予測することではない。文字通り自分の生活を賭けることなのである。単に未来を傍観者風に予測するのではなく、そのように予測された未来に立ち向かう心構えをすることなのである。その予測に付せられた確率はその構

えの姿勢の表現であり覚悟の程の表現なのである。九分通りこうゆくだろうと構えて手術をする外科医と、五分五分だと思いつながらの外科医はその構えが違うのである。そしてその手術の結果がよい時にせよ悪い時にせよ、この二人の外科医は異なる安堵や異なる弁明をするだろう。賭けた人は否応なく賭けの結果を負う以外にはない。

しかしこの賭けはあてずっぽうの賭けではない。過去の事例を参考にし、過去の統計を参照しての賭けである。この過去を指針にする仕方の一つを確率論が提供するのである。そしてその仕方は保険会社に利益をもたらし、野球評論家に職場を提供し、気象庁を不可欠の官庁にした。

しかしこの確率論が一回きりの事件に付する確率の小数値は決してその賭けの心構えそれ自身の測定値ではなく、参照された過去の指針の示す値なのである。心構えそれ自身にかりに度盛りができるとしてもそれは極く大ざっぱなものでしかあるまい。

確率論の指針にせよ、それ以外の指針（勘とか天からの声とか）にせよ、どの指針に導かれるのが最も有利であるか、それは前もって不明なのである。それが明瞭であるならば賭けの必要はない。われわれ今日生きている人間はともかく今日まで生きてこれるだけの賭けに成功した人間である。適者生存の生き残りなのである。だが明日は？ それは明日になってみなければわからない。

（大森莊蔵『流れとよどみ』より）

\*1 あがなう…買い求める。

\*2 度盛り……数値を示すめもり。

\*3 適者生存…外界に最も適したものだけが生存繁栄すること。

問一 A E に入る最も適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二度用いてはいけません。

ア つまり      イ しかし      ウ 例えば      エ また      オ ちょうど

問二    に入るものとして、ふさわしくないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

|              |            |                |         |
|--------------|------------|----------------|---------|
| ア 明日の天気      | イ 先月の目標達成度 | ウ 次の打者のヒット     | エ 来年の地震 |
| オ 次のランプのめくり札 | カ 去年の旅行    | キ 山をかけた試験問題の出様 |         |

問三   線部 a～dの意味として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「云々する」      ア あれこれということ      イ 想像すること      ウ 肯定すること

エ 否定すること      オ 忘れ去ること

b 「よしあし」

ア 考え方      イ 手段や方法      ウ みちすじ      エ すぐれた方法      オ 良いか悪いか

c 「傍観者風」

|                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| ア 誰に対しても乱暴をする人のような態度 | イ 他人の未来を予言する力を持つ人のすがた |
| ウ 自分には関係ないことと結論づけること | エ 関係ない人であるかのような様子     |
| オ 他人よりもすぐれているかのような態度 |                       |

d 「否応なく」

|                  |               |          |
|------------------|---------------|----------|
| ア 承知しようとしまいと関係なく | イ 決して否定せずに    | ウ 許可を求めて |
| エ 許可を得られずに       | オ だれも認めようとせずに |          |

問四——線部1「もちろんなるまい。」と筆者がいう理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 一回きりの投げでチャンスが半々だというのは、確率を予想する意味がないから。
- イ 一回きりの投げで表が出ても、あと九回は裏が出る可能性があるから。
- ウ 一回きりの投げでは、確率が半々であることを証明できないから。
- エ 一回きりの投げでは、確率ではなく偶然に左右されてしまっている可能性があるから。
- オ 一回きりの投げが問題なのに、両方の可能性があると言っていることになるから。

問五——線部2「それを受けるも拒むも私の自由だと言っても、その一方をすれば他方を示す道が論理的に失われるのと同様である。」の例として正しくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア じゃんけんでチョキを出すと、パーやグーを出すことはできなくなる。
- イ A君の家に遊びに行くと、同じ時間にB君の家に行くことはできなくなる。
- ウ 算数を得意科目にすると、国語や社会は得意科目にはできなくなる。
- エ 一台のテレビで、ある番組を選択すると、特別な機能や録画を用いない限り、他の番組を見ることはできない。
- オ 午前八時に大宮駅発の電車に乗ると、午前八時一分に大宮駅に到着する友人と会うことはできなくなる。

問六——線部3「うまく生きられる」はどういうことですか。十字以上二十字以内で説明しなさい。

問七——線部4「あるまい。」を同じ意味になるように五文字で言い換えなさい。

問八——線部5「これらに真偽をいうことは場違いである。」はどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 約束や誓いの真偽は、長い目で見なければ、守られたか、破られたかの判断はできないということ。
- イ 約束や誓いの真偽は、直接関係した人がいないところで、客観的に判定するべきだということ。
- ウ 約束や誓いの真偽は、守られたか、破られたかではなく、一回きりの事件について判断するべきだということ。
- エ 約束や誓いは、本当か嘘かを判断するのではなく、守られるか、破られるかが大切なのだということ。
- オ 約束や誓いは、それが本当か嘘なのかという、一回きりの事件について判断するべきだということ。

問九——線部6「確率論が一回きりの事件に付する確率の小数値は決してその賭けの心構えそれ自身の測定値ではなく、参照された過去の指針の示す値なのである。」はどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 確率として示された値は、心構えの測定値ではないことに注意しなければならない。
- イ 確率として示された値は、過去の指針の示す値なので、おおざっぱに考えるべきだ。
- ウ 確率は過去の指針の示す値なので、現在の状況をふまえて活用した方がよい。
- エ 確率は過去の指針の示す値なので、それを活用する人自身の判断を加えて活用しなければ無意味である。
- オ 確率は過去の指針全体を示す値なので、心構えをする人だけのものではないことを忘れてはならない。

問十 次のア～キの文を読み、本文の内容に合うものにはAを、合わないものにはBを解答欄に記入しなさい。

- ア コインの表が出る確率が二分の一であることに意味はない。
- イ 天気予報は過去の気象統計に過ぎず、明日の天気の参考にしかない。
- ウ 目標を持つことは正しかったか誤っていたかを定めることができないので、意味あることとはいえない。
- エ 将軍や病人にとって、明日の天気は金や命であがなうことになる差である。
- オ 一回きりの事件については程度を含んでの成功失敗を言うことだけができる。
- カ 筆者は自分と似たような考えを持つ人としてオースティンという人物を登場させている。
- キ 今日生きている人間は何らかの指針に導かれて、生きるための賭けに成功した人間である。

問十一 本文全体をふまえて、――線部「私が今コインを投げようとする。そのとき裏がでるか表がでるか半々だ（ $\frac{1}{2}$ の確率だ）、ということは何を意味しているのだろうか。」に対する答えを、次の空欄に合うように二十五字以上三十字以内で書きなさい。

コインの裏が出るか表が出るかは半々だということは、（ ）を意味している。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

惇<sup>あつし</sup>は、父である正作が五十才の半ばも過ぎたころに生まれた男の子で、すくすくと育ち、今は船乗りにあこがれを抱く<sup>いだ</sup>少年である。すでに六十才を越<sup>こ</sup>していた正作は、そんな惇をいろいろな場所に連れて出かけた。梅雨も明けた時分、二人は七夕へ向けて笹<sup>ささ</sup>を取りに「青煙<sup>あおけむり</sup>」と呼ばれる峠<sup>とうげ</sup>に来ていた。一枚岩の上で昼食をすませ、山を下りようとしたとき、谷底を見つめた正作が何かを見つけた。

「ちよつと待つとれ」と言つて、谷側の岩の下に何かを見つけたらしく、水音の消えていく岩場の方角に降りはじめた。

「そこで待つとれ。こつちへは来るな危ないからの」

身をかめながら右手を岩肌<sup>はだ</sup>につけて左足からの足場を探るようにして谷の方へ向かった。頭が見えなくなるとサワツ、サワツと正作の岩草を分ける音が滝音に消えいりそうに伝わった。惇は言われたままにそこにいた。

何を見つけたのだろうと待っていた。

その時、ズンとにぶい音がした。

次にザアと何かが枝をひつかきながら落ちていく異様な音が聞こえた。オウツとさけびとも驚きの声ともつかないときれるような声がすると、ガラガラんと大きな岩が崖<sup>がけ</sup>から落ちていく音とそれが谷底にぶつかる乾いた不気味な岩音が耳に入った。

「父ちゃん、父ちゃん」

「……………」

「父ちゃん」

するとまた、ズルズルと何か重い物を引き下ろすような岩を震<sup>ふる</sup>わす音がした。

「父ちゃん。父ちゃん」

「……………」

惇は岩場のぎりぎりの傾斜<sup>けいしや</sup>まで身を置いて 1 を伸ばして谷底をうかがった。しかし惇の背丈<sup>せたく</sup>では下の様子は見えない。両手で岩を握<sup>にぎ</sup>りしめて腹ばいになるとできる限り背を伸ばしてみた。恐ろしい音のした辺<sup>あた</sup>りはななめに突き出た岩の真下に思えた。

「父ちゃん」

かすかに枝のぶつかり合うざわめきがした。

「父ちゃん」

「来るな」

2 からしぼり出すような正作の声が返ってきた。何かにすがりついているような押し殺した声だ。

惇は見えぬ方角に目を開いて 3 で探った。

今度はメリツメリツと木の幹が折れるような裂音<sup>れつおん</sup>が惇の胸を突いた。惇は必死で顔を上げると岩場全体を見回してみた。左手の少し低い位置に惇のいる一枚岩と同じような岩がせせらぎを隔<sup>へだ</sup>てて見えた。惇は立ち上がるとその岩場に向って走り降りた。小さな水たまりをいくつか作った流れは惇の膝<sup>ひざ</sup>までの深さで渡れそうだった。一気に水の中に入ると向かいの岩から生えた小枝をつかみ、すべる岩肌をよじ登り岩の上へたどり着いた。惇は 4 もつかず正作の声の方角を見つめた。

それは正作の身体<sup>からだ</sup>を支えるにはあまりにもか細い弱々しい松の木であった。岩間から横に八手のように枝を広げた松に正作は宙吊<sup>ちゅうりょう</sup>りでいた。しかも右手一本で大きな身体をかうじて支えているのだ。正作の体重を受けた松は幹<sup>ゆみ</sup>を弓のようにたわませて、正作が足場を見つけようと動いた際に今にも折れてしまいそうなしずみ方をしていた。下のほうはまっすぐ谷底へすいこまれるようにおそろしい空間があるだけだ。谷底は不気味な形をした大きな岩がどす黒い岩色をして待ちかまえている。惇を何よりもおびえさせたのは松の根に見えるくずれた岩肌の亀裂<sup>きれつ</sup>であった。

正作はそれでも片方の手をなんとか幹までとどかせようとしていたが、動くたび、松は異常なたわみ方をしていた。

上の岩から五メートルあまりすべり落ちている。ようやくしがみついた救いの 5 は残酷<sup>ざんく</sup>すぎるほど微力<sup>ゐりき</sup>だった。正作は足場を探して左の足をのばしたがつき出た岩の根から生えた松はつり上げたかえるの 6 のように空をふらせるばかりだ。

メリツとまた松がにぶい音を鳴らした。

「父ちゃん。父ちゃん、大丈夫か」

正作が顔を上げた。顔を真っ赤に硬直<sup>こうちよく</sup>させて、

「来るな……そこにいろ……来るな」と静かに惇に命じた。

「大丈夫か」

正作は目を閉じて大丈夫だと惇に答えた。

大きな声を出すと松は岩もろとも谷底にくずれ落ちる気さえた。惇はとっさにどうしたらいいのかが思い浮かばなかった。正作ならなんとか自力でこの場を切り抜けると思ったが、松は今の正作に手を離<sup>はな</sup>せといわんばかりにたわんでは揺<sup>ゆ</sup>れているのだ。正作はまた左手を引き上げようとしたが思うように身体を起こせなかった。

ガサツと音を立て上の岩肌から頭ほどの石が正作のすぐ横を落ちていった。カランカランと谷底で岩のぶつかる音がひびいた。

「父ちゃん。待つとれ。そこへ行くから」

「来るんじゃない」

1 今まで見たこともない鬼<sup>おに</sup>のような眼<sup>め</sup>をして正作は惇をにらみつけた。正作のほうへ寄せられた惇の身体が一瞬<sup>いつしゆん</sup>射たれたようにかたくなった。実際、惇の岩からは正作までの路<sup>みち</sup>を求めることは子供の力では不可能であった。

正作はしばらく動くのを止めてじっとしていた。惇は助ける方法を一生懸命<sup>けんめい</sup>に考えようとした。ひもひとつ見つかる場所ではない。すると急に水音が惇を追い立てるようにせわしく音を立てはじめた。

2 正作は静かに左手を上げると右手で幹を引き寄せるようにして膝を曲げて身体を持ち上げた。メリツメリツと今度は本当に根元から折れるようなきしみが聞こえた。しかし左手は幹に触れなかった。動作が止まった時、惇は正作が右手を離してしまうのではないかと感じた。

「惇……人を、呼んで……来い。さっきの……木こり小屋のじいさんだ。すぐに行け」

のどの奥からしぼり出したような低い声だ。

「わかった。すぐ、呼んでくる。待つとれ。すぐ呼んでくる。待つとれ」

惇は正作の目をもう一度見ると、すべるように岩をかけ下りた。勢いあまってそのまませらぎの中に腰から落ちた。たちまち上着までずぶぬれになった。一枚岩に上がると見えない正作に向けて、

「父ちゃん。待つとれ。すぐ呼んでくるぞ、待つとれ」

返事はない。それが惇をせきたてた。

(中略)

小屋が見えると惇は大声を上げて老人を呼んだ。急に涙があふれて耳や頬に走るたびに飛んでいった。

「おじさん。おじさん」

小屋に着いたが先刻そこで薪を束ねていた老人の姿が見えない。小屋の戸を開けると中は暗くて何も分からない。

「おじさん、おじさん」

惇はどうしたらいいのか分からなくなった。老人は引きあげてしまったのだろうか。見ると束ねた薪の束の上にたばこと布包みがある。惇は声を上げて小屋の四方を呼んでみた。しかし惇の叫ぶ声だけが薄暗い林の中に響いて返ってくるだけだ。それでも何度も呼び続けた。正作はまだ右手を離さず松の木にいるだろうか。いる。必ずいる。早くしなければ。正作を思うと涙がまた流れはじめた。声がかすれてしまう。

惇は肩を震わせてあたりの音をうかがった。

すると今惇の走ってきた川の方から人の歩く気配がした。老人の姿が映った。

「おじさん。大変だ。おじさん。父ちゃんが岩から落ちた。早く早く助けてくれ」

老人は惇の様子に驚いて、「どうした……」

「父ちゃんが、父ちゃんが落ちた」

「どうしたのじゃ。ゆっくり話せ、父ちゃんがどうした」

「父ちゃんが滝の岩から落ちた。細い木にぶら下がって片手でつかまっとる。細いから、木が折れそうじゃ。おじさんと呼んどる。早く、早く、死んでしまう」

老人は滝の方角を見て小屋へ走ったかと思うと肩から縄をかけて現れるや、惇の手を取り川のほうへ下りはじめた。老人は走り出すと驚くほど早かった。背は曲がっていたがグイグイと惇を引いてかけた。橋を渡って崖の道に入ると、

「大きな岩の下だな、滝の上の。丸い平らな岩の下だな、わしは先に行く。坊は後から来い」

老人は惇の手を放すと、どんどん遠ざかっていった。惇は遅れまいと後姿を追ったが左へ曲がった崖ぞいの道で老人の姿は消えてしまった。

(中略)

誰もいない。

惇は声を立てず耳を立てたがあたりには何も聞こえなかった。急に膝と肩がぶるぶるとふるえはじめた。耳元が熱くなり口の中がかわいた。人の気配がしない。にぎりしめた手が汗ばんで指の間をぬらしていた。

すると左の下の方のあたりから笑い声がした。笑い声は小さく聞こえてとだえたかと思うと前より大きな聞きおぼえのある笑い声に変わった。正作の声だ。

「父ちゃん」

惇は正作の名前を呼びながら声の方角へ走った。見下ろすと向かいの岩場とのはざま、流れが落ちる場所にある岩の上に、正作は笑いながら老人と座っていた。

「父ちゃん」

見上げた正作が笑って惇を見た。

「おお、惇、手をかけたなあ」

「父ちゃん」

惇は心の中で、父ちゃん、ともう一度呼んで正作を見つめなおすと、鼻の奥のほうでツーンと熱くなつてのどの奥に鼻水の苦さが逆流し泣き出してしまいうだった。でも泣くと正作に笑われる。必死になって笑おうとした。ズボンをにぎりしめその手で髪の毛を思い切り引っ張った。そして歯を見せるようにしてやっとな笑うことができた。にこやかな正作の顔を見るとこぼれそうな涙が

止まった。

(中略)

「いやあ、えらい目に会ったのう。この辺りの山も、もう老じゃからの。雨の上がりっぱなで、岩も緩んだんじやろう」  
正作はだまっとうなずいた。

「しかし何でまた、あそこに」

「いやあ、ちよつと……」

言いかけて自嘲するように左手で松の木の上の方を指さした。

「あれをちよつとつんで帰ってやろうと、色気を出したんで、山が怒ったんでしよう」

見ると松の木の上の岩場に紅紫色の花が咲いていた。

「おお、あんなところにさつきじゃのう」

老人は風にゆれるさつきの花をじつとながめている。

「家の者が花好きで……いやあ、変な色気を起こすと山にしかられる」

正作は気合いを入れて立ち上がると惇の頭をキュツとつかんでから尻をポンとたたいた。そのまま一枚岩の上へ歩くと左の腕を肩に寄せるように回した。老人も立ち上がりゆわえた縄をたぐり始めた。惇は老人のそばに歩み寄って、

「おじさん」

「なんじゃ」

「ありがとう」

老人は目を細めて惇を見るとうなずきながら、

「坊こそ、ようやくたのう。えらいぞ」

そう言つてチラッと岩の上の正作に目をやって、

「たいしたもんじゃ、坊の父やんは。あの身体をずっと手一本で支えとったんじやからのう。その辺のやつならとうに手を離しとる

わ。たいした人じゃ。えらい男じゃ」

その言葉に惇は正作を見上げた。肩を広げた青煙の頂きよりもずっと正作の肩は大きく見えた。

確かにそこに惇の正作が立っている。また、喜びが惇の胸の中でわき起った。

表までむかえていつもの声で笑った晴の顔が、正作の右手にまかれた手ぬぐいと血のにじんだハンカチを見て血相を変えた。

「たいしたことはない」と一言つげると正作は奥に入った。晴はあわてて医者を呼び、洗い場で手を洗う惇の身体も見回した。正作はその夜、夕飯を床でとった。晴は医者に容態を聞いて安心はしたもののあきれた顔をして惇を見ながら夕膳を食べていた。若い者に行かせるべきだったとか、どうしたのかと事の様子を惇にたずねた。惇はだまっていた。晴はますますあきれ顔で惇を見つめた。

(中略)

そつとふすまを開けると小さなあかりの下で正作は静かな寝息を立てていた。上布団を胸の辺りで折り曲げてそこに右腕をのせている。手当ての包帯の白さが暖かそうだ。惇は正作の顔をじつとながめた。どこからか老人の最後の言葉が聞こえた。

——その辺のやつならとうに手を離しとるわ。たいした人じゃ——

惇は正作の一字のくちびるを見つめて、この寝所で正作の寝顔を見るのは初めてだと思った。

「惇、惇、かぜひくよ」

ふすま越しの晴の声に正作はぼんやりと目を開けた。そうして惇に気づくとゆつくりと目をまばたいて、静かに笑った。そうして惇の目を見て、

「惇」

「なんじゃ」

「今日は……よう助けてくれた」

その言葉は惇の胸にまっすぐ届いて、鼻の奥から突然すっぱい空気が抜けたかと思うとわけもわからなく涙が次から次にあふれてきた。ずっと我慢をしていた今日一日の言葉が涙になって、ポタポタと音を立てたたみに落ちていく。肩がしゃくりはじめ正作の顔がおぼろになっていくのに、また涙が出てくる。それでも必死でこらえながら涙の中の正作の顔を見つめた。

「何じゃ、女兒か」

惇は首を横にがむしやらにふりながら鼻をすすった。今<sup>7</sup>すぐに布団の中の正作に飛びこんで行きたいと思った。女兒じゃない、女兒じゃない。するとふすまの向こうから、

「惇、惇。早よう寝まきを着なさい。もう、悪い子になってしまつてからに」

正作が首をしゃくりあげて、行くように合図をした。惇は涙をぬぐいながらうなずいた。

「かぜを引くと言うとるでしよう。本当にもう」

晴に涙顔を見られないようにサツと寝まきを取ると物干し場に出た。

「なんべん言うたらわかるの」

「ここで今着る。海を見るだけじゃ」潮風に当たった。涙は引いていった。

目の前に広がる夜の海は星影<sup>かけ</sup>がかすむほど鮮やかな月の光を西の棧橋<sup>さかばし</sup>のたもとから海の中ほどに悠然と浮かべている。水平線のあろうあたりは空のものと海のものともつかぬ淡い灯りが二つ、三つきらめいて流れていた。遠くの工場から犬の鳴くようなサイレンの音が海の上にはね返りながら屋根伝いを響いてくる。トントントンとやみの中から夜漁に出るポンポン船がまっすぐな音を立てながらちやうど隣の家の鬼瓦<sup>おにがわら</sup>の先から姿を現した。船は波の上を、すべる一枚の黒絹<sup>くろきぬ</sup>に変えながら棧橋のはしにゆらぐ月明かりに向けて進んでいく。椿田<sup>だえん</sup>の夏月と船先はお互いが引きよせあうように直線で結ばれていた。糸の力は強い。やがてマストの先が光ったかと思うと船は白い船体を一瞬の間に見せて湧沫<sup>ゆうまつ</sup>の余韻<sup>よゐん</sup>のまま淡色<sup>たんしよく</sup>の海へ船首をあげて消えていった。

いつか船に乗るんだ。

父ちゃんを連れて行くんだ。

惇はやや上った月に手をのびし空に向かって大きくのびをした。

\*1 晴：正作の妻。惇の母にあたる。

(伊集院静『皐月』より)

問一 1 6 にあてはまる言葉を次から一つずつ選び記号で答えなさい。ただし、同じものを二度用いてはいけません。

ア 息    イ 足    ウ 眉<sup>まゆ</sup>    エ 腹    オ 耳    カ 首    キ 手    ク 口    ケ 気

問二 ——線部1「今まで見たこともない鬼のような眼をして正作は惇をにらみつけた。」とありますが、このときの正作の心情を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父親の言うことを聞かない惇を制することで、父親としての威厳<sup>いげん</sup>を保とうとする気持ち。

イ 息子に助けられては格好<sup>かっこう</sup>がつかないため、何とか自力でこの状況を乗り切ろうという気持ち。

ウ おそろしい形相<sup>ぎようそう</sup>で威圧<sup>いあつ</sup>してでも、惇だけは危険な目にあわせるわけにはいかないという気持ち。

エ いま惇に來られては松が折れてしまうため、何としても自らの命の危機を防がなくてはという気持ち。

オ 自分の不注意で足をすべらせてしまったため、怒りをどこにつけていいかわからない気持ち。

問三 ——線部2「すると急に水音が惇を追い立てるようにせわしく音を立てはじめた。」とありますが、この表現に象徴される惇の今の心境はどのようなのですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

問四 ―線部3「や」と同じ意味・用法であるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もうどうなつてもいいやなんてこと考えたらだめだよ。  
イ 宝石店のケースの中には青いのや白いのが並んでいる。  
ウ 彼がやるというなら、必ずややりとげてくれるはずだ。  
エ テレビで紹介されるやこの本はベストセラーとなった。  
オ ああおそろしや、こんな小さな町で事件が起こるとは。

問五 ―線部4「急に膝と肩がぶるぶるとふるえはじめた。」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父親も老人も谷底に落ちてしまったのではないかと思ったから。  
イ 老人とはぐれ山の中で一人迷子まいごになってしまったと思ったから。  
ウ 父親を助けるため、山の中を走り回り疲れ果ててしまったから。  
エ 父親の無事な姿を確認し、今になり恐怖きょうふがこみ上げてきたから。  
オ 自分が今やれることをやりとげることができ、ほっとしたから。

問六 ―線部5「また、喜びが惇の胸の中でわき起った。」とありますが、惇が感じているここでの喜びはどのようなことに対するのですか。これよりも先に感じていた喜びとの違いを明らかにした上で、四十五字以上六十字以内で答えなさい。

問七 ―線部6「惇はだまっていた。」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 山で危険な目にあつたなどと晴に話してしまうと、今後、正作といっしょに山へ遊びに行くことを禁止されかねないと心配になったから。  
イ 事情を話せば晴が余計に心配することは目に見えていたし、正作が多くを語らない以上は、軽々しく話してもいけないと感じていたから。  
ウ 正作が追い込まれていた恐ろしい状況を思い出したくはなかったし、自分も心身つかれきっていて話す気力も残されていないから。  
エ 必要以上に心配して声をかけてくる晴にいい加減かげんわずらわしさを感じていて、子ども扱いされたくないという反発心を抱いていたから。  
オ 正作は晴のために花をつんで帰ろうとして危険な目にあつたのだから、正作がけがをしたのは晴のせいだという怒りを感じていたから。

問八——線部7「今すぐに布団の中の正作に飛びこんで行きたいと思った。」とありますが、ここでの惇の心情を説明したものと  
して最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 正作が助かったのは自分が助けを呼んできたおかげだという自負もあって、あこがれを抱いていた父に対して勝ち誇った気  
持ちでいる。

イ あれだけ大きなけがを負ったにもかかわらず、冗談を言えるぐらいまで正作が回復していることが分かって、ひと安心の心  
持ちでいる。

ウ 心配をして涙を流しているのに、女兒扱いするなど正作がばかにするようなことを言ったので、少しこらしてやろうと思  
っている。

エ いつも正作には自分の感情を素直に表したことはないのに、今は父の前で泣いてしまっているので照れくさをごまかそう  
としている。

オ もし正作が本当にあそこで手を離して落ちてしまっていたらという恐怖と不安が思い返されて、父を失うことへの心細さを  
感じている。

問九——線部8「惇はやや上った月に手をのびし空に向かって大きくのびをした。」とあるが、このしぐさに表されていること  
きの惇の心情を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の力で父の命を守ることができたことに嬉しさを感じ、父を越える自信を深めている気持ち。

イ これから先、年老いていく父や母のことを自分が支えていかなければならないと覚悟する気持ち。

ウ いつかは自分の夢をかなえて、偉大な父に認められる強い男になってみせるという決意の気持ち。

エ 自分が夢をかなえて遠くへ行こうとも、あの力強い父がいれば何事も大丈夫だと安心する気持ち。

オ 父の存在の大きさに自分の無力さを思い知らされ、夢をつかもうとしてもむなしいという気持ち。

## 東大クラス選抜Ⅰ

解  
答  
用  
紙

氏名

受験番号

整理番号

得 点

|   |  |
|---|--|
|   |  |
| A |  |

| 一  |    |    |   |   |
|----|----|----|---|---|
| 問三 | 問二 | 問一 |   |   |
| 1  | 1  | ⑨  | ⑤ | ① |
|    |    |    |   |   |
| 2  | 2  | ⑩  | ⑥ | ② |
|    |    |    |   |   |
|    | 3  |    | ⑦ | ③ |
|    |    |    |   |   |
|    |    |    | ⑧ | ④ |
|    |    |    |   |   |

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
|   |   |   |   |
| E | D | C | B |

| 二   |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|-----|--|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 問十二 |  | 問十 | 問八 | 問七 | 問六 | 問四 | 問三 | 問二 | 問一 |   |
|     |  | ア  |    |    |    |    | a  |    | A  |   |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  | イ  |    |    |    |    |    |    | b  | B |
| 25  |  |    | 問九 |    |    | 問五 |    |    |    |   |
|     |  |    |    | ○  |    |    |    |    |    |   |
|     |  | ウ  |    |    |    | c  |    |    |    | C |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 30  |  | エ  |    |    | 10 |    | d  |    | D  |   |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  | オ  |    |    |    |    |    |    |    | E |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  | カ  |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  | キ  |    |    |    |    |    |    |    |   |
|     |  |    |    |    |    |    | 20 |    |    |   |

|   |  |
|---|--|
| F |  |
|---|--|

|   |   |   |
|---|---|---|
| I | H | G |
|---|---|---|

[illegible]

|   |  |
|---|--|
| J |  |
|---|--|

|   |  |
|---|--|
|   |  |
| K |  |